

節目の交流事業に参加して

日中友好交流都市中学生卓球交歓大会は、昨年度、板橋区及び板橋区文化国際交流財団から板橋区卓球連盟会長あて参加依頼があり、本年4月に開催された連盟理事会の承認を得て、同行役員の一員として私が参加することとなった。

板橋区と石景山区との友好交流・協力関係に関する合意書調印から20周年を迎え、また、日中国交正常化45周年記念の節目の年でもあることから石景山区より大会の参加要請があり実現の運びとなったと聞いている。折しも調印の2年前、板橋区卓球連盟28名が石景山区を訪問し親善試合を行っている。

さて、前置きが長くなったが、大会6日間で私が感じたことは今大会のスケールの大きさや緻密性である。日本・中国全土から友好交流のある自治体同志がチームを組み参加していること、大会会場でのセキュリティーの厳格性や試合前のエントリーにおける身分証明（日本人はパスポート）確認、ラケットコントロールなどである。また、ホテル前には試合会場など選手や役員の移動に24台の大型バスが活用され、号車や発車時間も割振られており、運営スタッフや通訳は学生ボランティアが担うなど大がかりな運営を行っていたことだ。これは、両国の友好協会や卓球協会、各自治体担当者の連絡調整や事前準備の表れであり、その結集によるところが大きいと感じた。

次に今回の主役は何と言っても選手である。両区からは男女各1名ずつ計4名で構成された団体チームであったが、選手は現地で初めて会うまでお互いの技術レベルや言葉も違うのである。特に団体戦の混合ダブルスでは動き方やサインの確認も必要となる。しかし、事前の心配は気に留める必要も無かった。北京空港で会ってからは、卓球というスポーツを目的とした選手同志、集合場所や開幕式、チーム練習などにおいて最初は通訳を通じてのやり取りからジェスチャーを交えた直接のコミュニケーションに代わるのにさほど時間は要しなかったのである。最初の試合では、今回ブロック優勝した湖北省・長崎県チームと初戦を迎えたが、ラリーでは相手選手を随所に押していた場面もあり応援席も大いに盛り上がり感動した。2戦目、3戦目になるとベンチでは全員が立ち上がってガッツポーズをする場面も幾度となくあり、好プレイにひと際大きな歓声が上がっていた。これは、大会参加に挑む選手の汗滲む日々の努力の賜物であるとともに、コーチによるサイン確認の徹底や試合中での程よい所でのタイムアウトの要求などそれまで練習を支えて来たコーチによる存在と感じた。両区コーチに敬意をはらうと共に、4人の選手に感謝である。

最後に、今回の目的でもある両都市の友好関係をさらに深めることは、様々な場面を通じて達成出来たと確信している。今後もスポーツの発展と相互交流が増々進むことを願うとともに、最終日に表敬訪問の際にあたり大歓迎を受けたこと、6日間チームを暖かく迎えて頂いた石景山区の皆さんに感謝する。